

現代史研究と

現在の中国の思想と政治

賀 照田

(訳) 鈴木将久



一

自分でも不思議だが、二〇〇三年に発生した多くの出来事で最も私の記憶に残っているのは、SARSではなく、アメリカのイラク開戦でもなく、中国学術界の多くの人びとの国家権力に対する態度が変わったことである。

自分の記憶を不思議だと言うのは、二〇〇三年に発生したSARSとアメリカのイラク戦争が、まがいなく強烈で特殊な経験であったからである。SARSは少なからぬ人びとのヒステリーと多くの人びとの過剰反応を引きおこした。これほど大規模なヒステリーとこれほど広範囲な過剰反応を見たのははじめてであった。私は、現段階の社会

の脆弱さ、人間性の脆弱さ、およびいわゆる国際社会の存在の脆弱さを痛感した。またアメリカのイラク戦争は、テレビの同時中継もしくはほとんど同時の中継によって、完全に連続的で詳細な報道がなされた。その結果、この戦争はきわめて具体的で交感可能なものになった。しかもその結果、この戦争は不義で不必要な傷害や犠牲がかなりあったにもかかわらず、つまるところ英米が絶対的優勢——武器技術の絶対的優勢を保っていたため、強者の方がかろうじて抑制していたことを、観衆として思い知らされた。つまりもし状況が変わって、戦争の双方が最低限の抑制を失ったならば、現代の武器技術を考えると、現代の戦争の帰結は想像を絶することがわかった。

それでは、このように強烈で、かなりの程度、私たちの

時代と世界の脆弱さ・恐ろしさを示した経験が、私の二〇〇三年に関する記憶の中で目だたないのはなぜなのだろうか。この問題を整理するならば、このように答えるしかないようである。なぜかわからないが、後の経験と思考の中で、はじめは強烈だったこれらの経験を使いつづけ、反芻しつづけているうちに、SARSは、半ば無自覚のうちに偶発事件に分類されていき、さらには事実を認識していくうちにそれは偶発事件に過ぎないと意識されるようになっていった。今日もまだ終わっていないアメリカのイラク戦争は、知らぬあいだに私と関係のない遠くの出来事になっていき、さらには映画館でその時は震撼したものの自分と無関係な映画を見たときのように、時間の推移とともにしだいにぼんやりしていき、いくつかのシーンだけは鮮明だが意味をなさないばらばらの断片になってしまった。

対して、中国知識人の国家に対する態度の変化は、重要性は大きく劣るように見える。ところが時間とともに私の記憶の中で、事後に思想的な反芻をできなかつたSARSやアメリカのイラク戦争を超えていった。その理由は、このまちがいなく「極めて小さい」出来事が、私が一貫して努力してきた、現代中国の學術思想問題を批判的に整理し検討するという課題にとつて特別な意味を持っていることを、しだいに意識したからである。このように思考において常に立ちもどり、常に掘りさげつづけたため、二〇〇三

年のさまざまな経験・記憶の中でそれが突出した意味を持つようになった。

二〇〇三年に友人を含む知識人の国家に対する態度が変わったことについての思考は、はじめは私の「意外」感を基盤としたものであった。意外というのは一九九〇年代を考えたためである。毛沢東時代に學術領域が常に過度に政治化されていたこと、また一九八九年に国家権力が社会民主運動を鎮圧したことを背景として、一九九〇年代の中国の知識界の主流ディスクールおよび主導的雰囲気は、公的な場面では學術思想の自律性を語り、私的な場面では国家権力への疎遠感ないしは対立的心情を強調するものであった。私の感覚と印象では、こうした言論と雰囲気は二〇〇〇年以降も続いていた。そのため二〇〇三年に多くの友人や知識人が国家権力への支持を明確に表明したとき、おのずと「突然」だと強く感じた。そして「突然」感が生み出した「意外」感から、おのずと次のような問題が浮かんできた。この「突然」の発生をいかに理解すべきなのだろうか。

こうした問題意識にもとづいて一九九〇年代中期以降の知識界のさまざまな思潮・觀念・言論動向を読みなおし、さらに国家を支持する各種言説のロジックを詳細に考察・分析した。そこで私が理解したのは、多くの知識人が国家権力を積極的に支持するという二〇〇〇三年の現象は、じつ

は「突然」ではなく、したがって「意外」と感じるべきでもないということであった。「突然」や「意外」を感じたのは、私が九〇年代中期以降とくに後期以降の変化に敏感でなかったためにほかならない。つまり思想・學術の国家権力への理解の仕方において、九〇年代後期以降中国の知識界ですでに大きな変化が生じていた。変化の結果、知識界の多くは国家権力に対して九〇年代初中期とまったく異なる機能を与え期待を寄せた。そのため中国の国家権力が、知識人の与えた機能や期待に適合するかに見える政策や公約を示したとき、知識界の多くは、自らの期待に合致する外在的契機が現れたと歓喜し、支持および歓迎の心情を公開するにいたった。

二〇〇三年・二〇〇四年に大量に公表された、国家権力に熱情を示した知識人の説明を見るとそれははっきりしている。少なくとも語られた理由を見る限り、二〇〇三年・二〇〇四年に国家権力への熱情を明確に表明しはじめた知識人は、二〇〇二年に胡錦濤・温家宝が江沢民・朱鎔基の後継として権力を握って以後、国家権力に大きな変化が生じたと述べている。彼らの見るところ、胡錦濤・温家宝も権力についた直後は「大国」「盛世」といった中国の現状にまったく現実感を欠いた挙動を行ったが、すぐに現実の状況への認識と応答を行い、注意力のかなりの部分をふり向けて、中国内部の社会危機や社会問題に重大な注意をは

らうようになった。そして貧富の格差、三農問題から環境や生態の危機、さらには医療、教育、就業など一連の危機・問題への解決を積極的に対応え、約束するにいたった。

胡錦濤・温家宝が危機と問題に積極的に対応したことを背景として、多くの人は善意をもって政府の一連の挙動、政策、公約を称して「胡温新政」と述べた。この「胡温新政」と「胡温新政」に対する善意の期待が、多くの知識人による国家権力への支持表明の決定的な外在的契機となったことはまちがいない。

当時、左派を自認する人びとが国家を支持しはじめたのは、胡錦濤・温家宝の多くの政策と公約が彼らの考えと合致していると考えたためである。他方で自由主義者も国家への態度を変えた。彼ら自身が述べた理由は、やはり新しいリーダーが彼らの重視した問題と危機に積極的に対応したためというものであった。しかしよく見てみると、中国の自由主義者が国家に転向した理由は、当事者自身の言いのほかにもあることがわかる。一九九二年の鄧小平の南巡講話以降の中国の歴史の展開、およびアメリカが中心に座ったポスト冷戦時代の世界の歴史の展開の結果、中国の自由主義者は、彼らが九〇年代初中期にいだいた期待が歴史の展開の中ではずれたことに気づいた。例えば中国の市場の実践は、彼らがもともと期待していた中産階級を主とする「紡錘型」社会を作りあげず、むしろまたたくまに、

膨大な低収入グループと少数のトップからなる、危機に充ちた「ピラミッド型」社会へと変貌した。当時彼らが大きな期待を寄せた新興企業家階層と自主的空間を相対的に増やしつつけた知識階層も、彼らの理想であった「市民社会」を形成する中堅作用もしくは積極的作用を果たさなかった。市場化の進展も、現在の国家権力に代わる政治的・社会的力量を生みだすことができず、むしろ中国に、もともと予想していなかったもしくは充分には予想していなかったさまざまな社会問題・社会危機を生みだした。こうしたのもろものため、中国の自由主義者に、中国における国家問題の複雑さを認識するものが現れた。そして国家問題の複雑さの認識と自由主義の立場とが結合して、中国の多くの自由主義者は希望を現在の国家権力に向けるようになった。彼らは共産党が革命党から政権党へと転化し（これは現在の中国共産党自身の願ひとも言える）、さらに政権党から選挙政党へと転化し、それによって現実的に必要とされる国家機能の安定を保つと同時に、彼らの自由民主への期待も実現されることを願った。

国家への否定、不支持から現体制への再認識、一定程度の支持、さらには期待にいたった以上のような一連の変化には、共通の重要な背景があった。一つには中国が世界にますます深く入り込み、世界から離れられなくなったこと。もう一つには世界との接触が多くなり、理解が深まる

につれて、アメリカが積極的に進めるグローバル化は世界の大同の開始ではなく、国民国家の超越でもなく、逆に多くの面において国家の機能の活性化と強化を求めていることを、中国知識界がはつきりと理解するにいたったこと。

世界のさまざまな場面で現実に行われていることへの理解が深まり、世界の中国に対する種々の態度（例えば広く流行している「中国脅威論」など）に反発したことによる。中国の知識人は国家の問題を再考することを迫られた。そしておのずと、多くの中国知識人が自身と国家との心理的な関係を再調整し位置づけしなおした。

二〇〇三年・二〇〇四年には多くの知識人が当時の国家に対して強い支持と熱情を表明したが、それは、不公正に對する情理にかなない合法的でもあった多くの抗争が現体制から粗暴な対応と暴力的な弾圧をうけたこと、さらには知識人にとってより切実な言論・出版・メディアへの統制が強化されたことなどによって、いささか弱まりはした。そして多くの知識人は国家に対する情熱的な称讃、弁護をやめ、自制やためらいを示すようになった。とはいえ、公開もしくは半公開の場面で、とくに私的な場面においてはなおさら、国家に対する過剰な弁護や同情を表明することはまだ珍しくない。それは現在の知識界と一九九〇年代の知識界を分ける最も重要な標識となっている。

公民の権利を守る行動に対して粗暴な弾圧を加え、言

論・出版・メディアに対する理由なき統制を前任の政府（江沢民時期）以上に行う政府を、多くの知識人がなお支持し続け、あえてそれを説明したり、はては弁護するのはいったいなぜなのだろうか。これが重要な問題であり、さらに深く分析すべきであることは疑いない。しかし本論は、多くの知識人が現体制への支持に向かった現象を思考するにあたって、二〇〇三年・二〇〇四年に国家権力への転向が「突然」表面化したことを検討したこれまでの議論のあと、続けてこうした興味深く重要な問題に向かわず、さらに一歩進め、彼らが国家のために説明・弁護した内容と形式、およびその説明や弁護が学術思想にもたらした帰結を考えたい。彼らがなぜ説明や弁護をしたのか、どうしてこのような仕方（さ）で説明や弁護をしたのか、などは将来別稿を準備するつもりである。

二

国家を弁護・説明する理由の中で、以前よく言われたのは、「国家が支配する資源が不足している」であった。その説明はすでにまったく通じなくなっている。

一九九〇年代中期の税制改革以降、中国の国家財政は一貫して有利なポジションを占めつづけた。二〇〇〇年以後、中国の国家財政は経済成長率を上回るスピードで成長

を続け、またたく間に税負担の重い国家になった。二〇〇六年を例にすると、GDPが日本の半分に満たない中国で、国家財政収入は日本を七千億元も上回った。二〇〇七年になるとその差は一兆元以上になっている。ところが中国は税負担のGDPに対する比率が過剰に高いのに、給与のGDPに対する比率は過剰に低く、国家財政による社会福祉、社会保障への支出も過剰に少ない。このような状況下で国家の支配できる資源が不足していると言っても説得力を持ちがたいことは明らかである。

国家支配下の資源の不足という弁護の失効が明白になったのち、明らかに国家と関係があるが国家に不利な現象や問題が出現すると、その説明を、派閥闘争の存在、既得利益集団の存在もしくは国家の下層権力による歪曲など（さ）に求めることが多くなった。そのようにして、彼らの想像上の胡锦涛・温家宝を中心とする中央政府に対して善意の強弁を行い、道義を与えることが、近年最もよく見られる中国知識人のいわゆる胡温新政弁護の典型的モデルである。このような弁護の方式が以下に述べる帰結をもたらすことは明らかである。一つには、複雑な歴史と現実が、事実上、是非のはっきりした忠奸モデルに単純化されてしまうこと。八〇年代の歴史が改革と反改革に単純化され、改革が善、反改革が悪とされたことと同じである。現在このような説明と弁護は、損益をこうむる階層と既得利益集団の二

大陣営に現実を単純化し、前者を善、後者を悪とするものになつてゐる。第二には、こうした本質的に忠奸モデルである解釈モデル、あるいは下層官吏の歪曲という解釈モデルは、成立の根拠および原因には事欠かないものの、きわめて多くの問題への説明や答案とするには、問題を正確に深く理解する助けとならないのみならず、むしろ問題の検討・分析を深めるのに妨げとなることが多いこと。

多くの説明と弁護を以上のように評価するのは、もとより過失だけをとりあげてゐる嫌いがある。しかし私たちが頭を整理するのに役立つ。表面的には具体的脈絡と結びついてゐるかに見える説明と弁護は、じつは空虚で、モデルと先入観をあてはめたもので、誤りと言える。言い換えるならば、現実感があるかに見える胡温新政への同情者・弁護者たちは、じつは以下の問題を厳密に思考していない。歴史と現実を彼らの期待する目標から妨げるもの、彼らが解決を望む社会問題や社会危機を現実的解決から妨げるものは、ほんとうに彼らが主張する権力の掣肘だけだろうか。現在のきわめて多くの弁護は権力の方向への説明・暗示になつており、問題解決の道は胡錦濤・温家宝の権力掌握を有効にすることだと暗示してゐる。しかし問題はほんとうにそれだけだろうか。たとえ問題がほんとうに権力だけだとしても、それならば権力の問題をいかに認識し討議すべきなのか。中央の上層部の権力をかなりの程度胡錦

濤・温家宝に集中させることはまだ想像できるとして、それならば現在の現実的状況下において、中央の権力を下層まで実際に貫徹させ、すべての権力が既得利益集団の干渉を受けないことは可能なのだろうか。可能としたら、どうすればそれが実現できるのか。さらにいえば、現在の現実的状況下において実現するためには、特別な認識の後ろ盾が前提として必要ではないのか。必要であるならば、どのような認識を前提として持つべきか。そしてどうすればそのような認識を持つことができるのか。

したがつて、胡温新政を言祝ぐ知識人は、新政に対してほんとうに自己の貢献をしたいのであれば、大量に存在する問題を、客観的条件の不備や権力の掣肘などに性急に帰結させることなく、時間と精力を、現在はまだ明確になつていないが、自分たちが支持する方針や政策が将来遭遇するであろう問題に向けるべきである。私の見るところ、胡温新政が避けがたく進む道筋には、まだはつきりしないが明確な認識が求められる大量の問題が存在している。以下にいくつか挙げよう。

第一に、胡錦濤・温家宝が現在行つてゐる問題解決の考え方は、農村・農民・農業のいわゆる三農問題であれ、貧富の格差や社会保障の問題であれ、さらには国際面での外交の局面打開であれ、その手段の核心にあるのは、中国経済の高度成長と中央の財政能力の強大化である。それが意

味するのは以下のことである。自覚的かどうかは別として、彼らは高度経済成長と強力な中央財政能力を問題解決の根本的な前提とした上で、その前提のもとで、国家資源と財政収入の再配分を調整することを主たる手段としている。したがって、いかにして発展するかについて新たな模索をしないならば、また現在の国家財政のあり方を全面的に調整しないならば、胡温新政はこの前提を実現するため、本質的には、これまでの問題処理の考え方と方法を引き継ぐしかない。

胡温新政が半ば無自覚に依拠している前提が胡温新政にどのような意味を持つのか分析することが必要である。それをしなければ、実のところ、この前提を実現するための現実的な道筋と胡温新政が実現を望む目標（科学的発展観、和諧社会など）とのあいだの構造的な緊張関係に目を向けないことになる。こうしたことを言うのは以下のことを考えるためである。現在、胡锦涛・温家宝が直面している問題と危機は、かなりの部分、「安定がすべてを圧倒する、発展こそが強固な道理である」というこれまでの中国の発展主義および財政吸収モデルの帰結である。いまこの発展主義と財政吸収モデルについて根本から省察を行わなければ、それが新たな問題と新たな危機を生み出さないとどうして保証できようか。資源と財政の再配分によって問題と危機を一時的に緩和したとしても、新たな問題と危

機の出現によって効果が大きく損なわれないとどうして言えようか。しかも、このモデルのもとでは、経済発展の速度や中央財政の吸収能力がいったん下降すると、中央の問題処理能力も同時に減退する。とくに、発展速度や財政能力の下降が問題解決や危機克服のための処置と密接な関連があるとみなされた場合には、経済発展の速度と中央財政能力を守るため、彼らが現在主張している多くの人に「新政」と迎えられているさまざまな社会的・経済的政策を弱め、ないしは放棄する可能性が高い。

第二に、科学的発展観を提起したあと困難があらわれたが、そこには胡温新政の発展の問題に関する構造的な緊張が典型的に示されている。科学的発展観は耳には心地よい。中国の中央政府が社会の各階層のバランスに注意するだけでなく（和諧社会）、人間と自然のバランスにも十分な注意を寄せることを意味したからである。しかし否定しがたいのは、現実の発展に対して現在の科学的発展観が示している基準設定と介入は、主として資源、エネルギー、環境、生態などの角度から外在的に行う基準の設定であり、内在的な分析・把握でなく、また分析・把握を基礎とした発展に対する内在的な修正でもない。したがって緑色GDPなどの科学的発展の観念が、より強力な発展の衝動やより強力な現実的機制を前にして、容易に観念や紙の上に留まるのも当然である。第十一次五年計画で示された

多くの環境指標には何度も赤信号がともった。二〇〇六年にエネルギー消費量四％減、主要汚染物質二％減の目標をたてたが、達成できなかったのみならず、むしろ指標が上昇した。こうした事実は明確に以上の問題点を示している。^⑩

第三に、再分配を通じて問題解決をはかる胡温新政の手法は、現段階ではかなり有効である。^⑪しかしその有効性は、じつは順調な発展と国家の社会に対する過剰な吸収を前提としたものである。したがって状況が変わったときの再分配の方法がなお有効でありえるかは、胡温新政にとって問題となる。発展が順調であれば、社会問題もそれほど多くなく、問題の深刻さもさほどでないため、社会に対する国家の財政的吸収も比較的容易である。しかし発展が順調でなくなると、社会問題が増加するばかりでなく、深刻さも増し、社会から吸収可能な富が減少する可能性があり、過度の吸収は大きな抵抗をうけがちになる。とくに注意すべきは、発展が順調でなくなると社会保障、社会福祉にさらなる要求が出てきて、それが中国の国家権力の様態および慣習的あり方への挑戦となる可能性があることである。

もともと中国国家は、高税収・低福利・低賃金モデルによって潤沢な財政収入を手にしてきた。したがって表面的に見れば、国家が再分配を増やそうと考えても難しくな

い。しかしそのような考えは、中国の国家権力のもつ独自の特性を十分に考慮していないことは明らかである。財政の角度からみると、中国の国家権力はきわめて特殊である。一つには、多くの論者が指摘してきたように、中国の国家財政の強大さの裏には社会福祉・社会保障の支出比率の低さがある。社会福祉・社会保障の支出が少ないのみならず、医療・教育などの支出比率もきわめて低い。長年指摘されてきたこの問題が根本的解決を見ないのは、中国の国家権力のあり方自体が、過剰に多くの国家財政を消費していることと深い関係がある。もう一つには、中国の国家権力は、明らかに再分配の意味を持つ多くの財政分配および財政出動に対して、衝動的なほどの侵犯と流用を行ってきた。かつて上海市市長をつとめ、のちに中国政治協商会議副主席、中国工程院院長となった徐匡迪の発言を見ると、現在の国家権力機構の活動のあり様に対する彼の憂慮が明確に見てとれる。二〇〇六年に三農問題の解決のため国家計画から三千数億元支出することを議論した際、彼は次のようなことを述べた。彼の計算によると、三千数億の特別支出金は、八億の農民で割ると一人当たり四二四元であるが、農民の手には二四元すら渡らないのではないかと危惧を感じる。^⑫つまり、現在の国家権力の存在様式と活動のあり方そのものが、再分配を通じて問題解決をはかる胡温新政の考え方に対する構造的な挑戦となっている。こと

に発展が順調でなくなり、社会問題がさらに深刻になったとき、国家権力の存在自体が消費してきた分、および再分配に対して侵犯・流用してきた分をそれだけ減らすことができるか否かは、胡温新政をためす決定的な関門になるであろう。

思考の上でこうした構造的緊張に応答するためには、以下の二つの方向に思考をめぐらす必要がある。一つ目。現在の国家権力を迂回し、社会だけに依拠して、より効果的で流出の少ない社会の再配分システムを構築することは可能だろうか。もしほんとうに可能ならば、どのような社会的力量をどのように動員すれば、社会の再配分システムを良好に構築することができるだろうか。二つ目。もし現在の国家が、かなりの程度国家を迂回する社会の再配分システムの構築を許さなかったら、あるいは大きな責任を担う再配分システムを構築するだけの条件が社会の側で不足しているならば、つまり現在の国家権力そのものに依拠して再配分をするしかないのならば、現在の国家権力をいかに制約し、改善するかの問題を考えざるを得なくなる。

たとえ胡錦濤・温家宝が中央において他の権力者あるいは権力集団の掣肘をうけなかったとしても、彼らの方針・政策を実現し執行するためには、現在の国家権力機構に依拠するかぎり、各レベルの国家権力機構が彼らの方針・政策を実行する際に出現するさまざまな深刻な問題に向きあ

わざるを得ないことは言うまでもない。現在大きな問題が明らかになつていゝる国家権力機構に依拠しつつ、問題の破壊的な影響を可能な限りコントロールし消失させるためには、現在の国家権力に対する深い分析と理解が必要なのは明白である。そうしなければ、中央レベルでのすばらしい新政が基層にとどいたときには縮減したり、まったく違つたものになるだろう。ひどい場合は以下のようなこともありえる。中央が一方で民意にしたがうことを表明し、各種の社会問題を正視し解決することを約束しながら、他方で現在の国家権力機構に存在する問題へのコントロールと改善を有効に打ち出せなかったならば、胡温新政と国家権力機構とのあいだの構造的緊張関係のため、民衆の不満が基層権力に向かう可能性が出てくる。しかも中央が民意にしたがうことを表明すればするほど、社会・民衆の基層権力に対する不満が強まり、そのため社会・民衆と国家の基層権力とのあいだの衝突が引き起こされる可能性がある。

三

ここまで述べてきた三つの問題から明らかのように、胡温新政はじつは多方面にわたる強い構造的緊張を内包している。したがって、ほんとうに胡温新政を言祝ぐ知識人

は、胡錦濤・温家宝に不利な出来事に対して曲解して弁護をするより、胡温新政のこれまでの基本方針と方法が内包する構造的緊張に対する思考に精力を用いるべきである。すなわち、どうすれば経済成長のスピードと求められる国家財政能力を保ちつつ、社会の不安定を引き起こす社会問題、社会危機およびエネルギー、環境、生態などの危機を有効な形で取り除くか、少なくとも弱めるかを思考すること。科学的発展、和諧社会といった観念を提起したり、こうした観念の直接的な運用によって過去を修正し、未来を展望しなおし、現実への対処を計画しなおすだけでは足りない。現実に対応して提起されたこうした観念を、現在の歴史・現実の中で順調かつ有効に実現させるためには、明確な問題意識を持つて、今日の現実の根源である中国の現代史を再検討することが必要である。胡温新政が、科学的発展観や和諧社会論を歴史・現実の中で順調かつ有効に実現したのであれば、少なくとも以下の二つのことに対して同時に細心の歴史的分析をほどこして研究・把握をする必要がある。すなわち、中国経済が高度成長を続けられた原因（いわゆる中国の奇跡の問題^①）と、「中国のように古くから貧富均等の意識を持ち、しかも数十年にわたり平等を強調する社会主義実践を行った国家が、わずか二十年たらずで、数十年ないし百年以上資本主義を行った周辺の国家以上に貧富の差が拡大したのはなぜか」を考へること。

どのような制度を設計し、工夫をほどこせば、現在の国家権力機構を有効な形で改善し活動させ、各レベルの権力機構をより建設的でより有効でより破壊の少ない形にすることができらうか。その問題への構想を手に入れるためには、国家の現在の活動のあり方の論理と、権力のポジションに在る主体の精神状況を明晰に理解することが必要である。そしてその二点を明らかにするためには、歴史的な問いが必要である。例えば、「経済改革と同時に、家長制・ワンマン問題からの離別を出発点とした制度改革が叫ばれたものの、二十年を経過した今日、大多数の国家権力層において、トップの権力が改革前よりも一層制限を受けなくなつたのはなぜだろうか。職務上の権限のみならず、人事権および財政上の権限までトップに集中している」^②、「数千年の義理の伝統を持ち、近数十年は理想と信念を掲げる伝統をもつた中国のような社会が、わずか十数年で、少なくとも言語のレベルにおいては実利至上主義の社会に変わってしまったのはなぜなのか。その過程はいかにして生まれたのか。その歴史機制および観念機制はどのようなものか」^③、「中国経済が高度成長をとげ、物質生活は多少の差はあつても誰もが明らかに改善し、生活中の自由な空間も大いに増大したのに、大多数の人の精神生活において苦悩と不安が増えているのはなぜなのだろうか」^④など。

これら重要な問題が避けがたいものであり、いずれも現

代史の把握と理解に深く関わっていることは明らかである。こうした徹底した問いを必要とする問題の角度から、国家権力への弁護に熱心な知識人を見るとわかることがある。彼らは重要で避けがたい現代中国の歴史の問題に対して、理解・把握・蓄積が少なく、少なからぬ人はどうしてこうした問題を認識しなければならないのか——これらの問題が現在および予測可能な未来の中国において構造的にどのような位置を占めるか、これらの問題と彼らが熱心に弁護する現象とのあいだにどのような関係があるのか、など——について最低限の理解すら持っていない。まして以下のことを思考するにはほど遠い。すなわち、いかにして問題に対する効果的な手掛かりを見つけるか、いかにして自己の目標と自己の手掛かりにとって効果的で実行可能な道筋を作り出し、こうした問題への深い認識と分析を行えるようにするか。

現在の国家の活動のロジックを把握すること、現在の権力機構の具体的人物の実際の精神状況を認識すること、この二つの問題は私的な議論ではしばしば触れられるものの、知識界が正面から向きあう大問題にはなっていない。それに対して、中国の奇跡がどうして起きたかの問い、中国の貧富の格差の社会危機の議論は、公開の場でも私的な場でも議論の焦点となっていて、そればかりか近年は知識界が正面から取り組み把握せんとする重要な焦点となつて

おり、相当の数の成果も出版されている。それではどうして私は上述の二つの問題を強く提起するのであるのか。それは以下の理由による。十数年前に始まった中国の奇跡の発生を問う一連の研究について、その貢献を否定する人はいないだろう。しかし、こうした研究が始まった当時に芽生えはじめ、現在きわめて深刻になっている諸問題に対して充分な敏感さを欠くため、もしくは敏感であっても問題の解釈と理解が単純に過ぎるため、中国国内の大多数のこの種の研究はいずれも、半ば自覚的半ば無自覚に、中国の改革開放の正しさを証明するものであることを否定する人もいないと思われる。しかも後になって深刻な問題もしくは危機が表面化するにつれて、こうした研究はおのずと広く注目されている問題や危機に応答せざるを得なくなつたが、こうした受動的な応答は、自己の研究の方法を根本的に省察することに結びつかなかった。そのため多くは表現のレベルで有効性に留保をつけるにとどまった。厳しい言い方をすれば、多くの言論と研究はすべて「惜しむらくは」モデルと概括できる。「惜しむらくはこれこれの問題への注意が足りなかつたため、今日目にするこれこれの問題が発生した」といった具合である。別のより興味深い研究として、中国の市場化の過程で現れたレントシーキングや独占に着目したものがある。ただ残念ながら、レントシーキングや独占についての多くの現実分析と批判は、中国の国

家権力が理想的でないことを指摘するだけで満足してしま
い、歴史的事象であるレントシーキングや独占を、現代中
国の歴史と現実の機制の中に置いて、より複雑な把握や分
析を加えていない。かくして、強い現実意識を持つこの種
の批判も、的確な実践的設計に最も重要な、正確で精緻な
歴史的・現実的認識に進むことはできていない。

また、貧富の分化など社会問題、社会危機に専心する認
識もある。彼らの視角はほとんどの場合現実批判であり、
現実の正しさを証明するものではない。しかし数年間の成
果を見て、私たちはこう言わざるをえない。観念および心
理の上でほとんどの人は強烈な現実意識、現実への責任感
を持っているが、問題と危機について歴史と現実のレベ
ルでの認識と理解は依然としてきわめて不足している。歴史
と現実レベルでの認識という点で、今日の貧富の格差の社
会危機についてはつきりとわかる主要な問題は二つある。
一つは、近年農村と農民の生活が非常に困難に陥った現象
の背後にある、制度・政策・法規の問題、もう一つは、農
民工の収入が長いこと当然あるべき改善をされなかったこ
との、制度・社会・政策・法規の問題である。こうした事
実を比較的明白に認識できる理由は、知識界の批判的介入
も関係がなくはないが、それ以上に、基層活動の経験を持
つ官吏（『我向総理説実話』〔日本語訳『中国農村崩壊』N
HK出版〕の作者李昌平は、長年にわたり農村の基層幹部

を務めてきた）、敏感な記者、および現実への対策を行っ
ている政府内の研究者がこの現実を整理し、公表したから
である。

現実に対して強い責任感を持ち、それなりの学術訓練・
思想訓練を受けてきた知識人が現実^①に介入しているにもか
かわらず、歴史と現実に対する充分で多くの人の期待に添
う深い認識・警醒がないのはなぜなのだろうか。むしろし
ばしば、自分の関心と介入の契機となった部分の現実・現
象をとりあげ、既成の観念のロジックや解釈のロジックに
当てはめるばかりなのはなぜなのだろうか。このようなこ
とが繰り返されると、現在の中国知識人は、明晰な概念を
運用して現実と現象を整理する能力に重大な欠陥がある
——現象をとりまく歴史的な脈絡と現実の脈絡の中でその
現象を明晰に把握する意識と能力に不足がある——と言わ
ざるを得なくなる。一般的な方法と意識のレベルでこの問
題を検討することはもとより重要である。しかし、もしほ
んとくに、具体的な歴史と現実の境遇の中で、歴史と現実
の脈絡から遊離することなく厳密で明晰な概念を用いて問
題を整理したいのならば、一般的なレベルの検討によって
具体的に克服しなければならぬ困難に代替したり、困難
を縮減することはできない。克服すべき多くの問題の中で
一つ重要な問題を挙げるとこうなる。いかにしてインスピ
レーションに満ちた問題提起をできるか、そして問題提起

により歴史と現実の肌理を開くことを通じて、私たちが思考する問題が形成されてきた歴史と現実の機制を正確に捉えることができるか。

四

ここまで近年の知識人による現在の国家権力に対する積極的な説明や弁護の内容を質疑してきたが、知識人が権力に支持や熱情を示してはならないと述べているわけではない。私が指摘したいのは以下のことである。いわゆる胡温新政、とくにその核心にある科学的発展観、和諧社会論および関連する実践の考え方と政策は、中国が抱える切迫した重要問題を網羅し、それに挑んでいるものの、基本的な観念のスタイルと現実に行う国家権力機構は、構造的に多方面の緊張をはらみ、歴史的に多方面の困難をはらんでいる。そして現在見られる説明と弁護は、科学的発展観や和諧社会論そのものを豊かにし改善する助けとならない。それどころかむしろしばしば、観念や政策の制定者および執行者の歴史感覚と現実感覚を誤る可能性がある。言い換えるならば、本稿で彼らの弁護と説明の内容を質疑するのは、批判のためでなく、以下のことを気にかけるせいである。いかなる問題意識を持ち、どのように歴史と現実を掘り下げて視野を手に入れれば、知識人の支持と熱情を

開いて、目標に向けて積極的な意味を持つ成果を引き出すことができるであろうか。あるいは、合理的で有効な政策を打ち出すのに不可欠な歴史と現実に対する深く正確な認識を得る助けとなり、それによって、歴史と実践についてより精緻で豊かな内実を観念に与えられるであろうか。

本論にもどろう。私はここまで、胡温新政に熱情を示す知識人について、どのような問題提起と思考をすればより積極的な貢献ができるか議論してきた。容易にわかるように、その着眼点は一般的な意味での観念と歴史を直接的に指向しているわけでない。私は観念と歴史の緊張関係・錯綜関係から問題を引き出し、思考を生み出すことを目指している。つまりこういうことである。ここまで述べてきたいくつかの問題は、表面的には歴史や観念を指向していると思えたとしても、「胡温新政」の多くの観念と政策が積極的な意味を持つことをまず承認した上で、観念や政策を直接的に歴史と現実の機制に投げ込んだとき遭遇するであろう困難を思考し、それを通じて歴史と観念に問題提起をするものである。

例えば、「中国経済の奇跡」がどうして発生したかの問いは、現代中国の深刻な貧富の格差がどうして急速に広がったかの問いと、分けて考えることなく、同時に向きあわなければならない。なぜならば、この二つの問題は歴史

の脈絡の中でもともと無関係でないからであり、それ以上に、現在の和諧社会論が多くの人たちのもとで単なる再分配問題、発展の成果と国家財政を国家がいかに再分配するかの問題になっているからである。そのような議論のあり方に認識の面に対応しているのが、「中国経済の奇跡」と「貧富の格差の急速な拡大」を分ける姿勢である。現在よく見られる、両者を分けて現代中国の歴史を問う方法では、この現実を生み出した現代の歴史の緊張部分に分け入り、現代史の複雑さを認識・把握できないことは明らかである。そればかりでなく、現実に対する私たちの理解と感覚にも直接的な影響を及ぼす。すぐわかるように、「中国経済の奇跡」の問題と中国の深刻な貧富の格差の急速な拡大の問題を分けることを前提として再分配の実践を考えることは、和諧社会論や科学的発展観のもつ発展・分配・科学的発展の観念と、現実の発展の実践とのあいだに存在する緊張関係を解消、弱体化させる助けとならない。そればかりか、構造的な緊張が一定の条件の下でより一層深刻な問題になったとき、構造的緊張に対する事前の思考の準備が不足しているため、現実の実践を、だれもが望んでいない古い実践の道筋に戻らせることになる。

また例えば、中国の奇跡の問題と貧富の格差の問題という知識界ですでに焦点となり相当の成果をあげている問題以外に、「家長制・ワンマン問題からの離別を出発点とし

た制度改革」がどうして反面に向かい、過度に実利主義的な日常言語状況および精神的主体的状況が生じたのかなどの諸問題がある。こうした問題の提起が、国家権力・制度の実際の活動のあり方と権力のポジションにいる主体の精神状況への認識と観察に人々を促すものであることは言うまでもない。その理由は以下の通りである。いわゆる胡温新政は現在のところ主として現有の国家権力機構に依拠して実行されており、当面はこの権力機構を根本的に回避する可能性は見いだせない。したがって、どのような制度を設計し、工夫をほどかせば、有効な形でこの機構を改善し活動させ、各レベルの権力機構をより建設的でより有効でより破壊の少ない形にできるかは、思考と解決の求められる重要な問題である。そして言うまでもなく、この重要な問題を思考し解決することは、国家権力・制度の実際の活動のあり方と権力のポジションにいる主体の精神状況を深く認識することから切り離せない。

こうした問題を提起する第二の理由は以下のものである。少し注意深く現代史を振り返ればすぐわかるように、近年多くの人が憂えている貧富の格差などの問題、生態環境、資源の危機などの問題は、一部分の観念・制度・政策が誤ったことから生じた帰結であるばかりでない。それは現代中国のより広範な、制度のあり方、政治権力のロジック、社会のあり方、多くの観念が混交する文化思想状況、

日常生活の理解と方法、主体の精神状況などと密接な関係がある。ここで制度改革が反面に向かった問題を歴史的に考察することが重要であるのは疑いない。それによつて私たちは、中国の現代史および中国の発展主義が独特なものになった理由をめぐる根本的な要素・問題について、深い

認識と把握をすることが可能になる。こうした探究から浮かび上がる要素・問題を、「中国の奇跡」や「貧富の格差の急激な拡大」の探究から浮かび上がった要素・問題と結合させて、同時に整理し思考すること。そうしたときにはじめて、私たちは基本的な認識の構造を構築することが可能になる。そうした認識の構造は、現在の中国の具体的な問題と現象を感受するよう、効果的で責任感を持ったやり方で人びとを助ける。しかもこうした基本的歴史認識構造は座標軸の役割を果たし、歴史と現実の中で発生したさまざまな具体的な問題と現象に対して、私たちが迅速に分け入り、把握し、位置づけるのにきわめて有益となる。それほどばかりでなく、認識構造を構築する際に深い貢献があつた問題を、その構造が照らし出す歴史の場に再度置きなおし、再観察、思考、評価を加えることで、すでにかなりの程度処理されているこうした問題を、より全面的より正確に認識するよう人を促すことにもなる。それはまた、「中国の奇跡」や中国でどうして貧富の格差が急速に広がったのか等の、すでに広く注意を集めているが、思考の道筋が

じつはかなり固定されていて、それに関連する思考も閉ざされている重要問題について、再認識し、再度観察し、評価しなおす条件を得られるということでもある。

知識界ですでに焦点となり相当の成果もあげている中国の奇跡の問題と貧富の格差の問題の他に、「家長制・ワンマン問題からの離別を出発点とした制度改革」がどうして反面に向かったのかの問題を提起する第三の理由は以下のとおりである。この問題をより良く思考・理解することとは、問題探究の視野を改革開放以後の新時期に封じることなく、歴史の視野を広げることを要求する。改革開放を旗印とした文革後の中国史の展開は、大きな成果をあげたとはいえ、構造的で重要な新しい問題も生み出した。その新しい問題の誕生から変遷の過程は、実のところ、毛沢東時代の遺産のうち受容・転化するべきものを新時期が十分に受容・転化できず、逆に毛沢東時代の遺産の影響を受けるべきでないところで遺産に束縛されていることと深い関係がある。

文革終結後、改革開放が始まったばかりの歴史をよく見るとはつきりわかることがある。一方で鄧小平は明らかに毛沢東の残した中国を基盤にして自己の改革を展開した。彼は文革を否定はしたが、ポスト文革時代に現れた毛沢東に対する過度の否定的思潮や文革を含む毛沢東時代への全面的な批判には反対した。そして毛沢東思想を彼が主導す

る時代の基本的スローガンとして堅持することに同意し、さらには文革が終結した直後に発生した、それまでの社会主義の歴史への明白な挑戦あるいは否定であった社会運動を、政権の力で厳しく弾圧した。しかし他方で、当然ながら、鄧小平および後継者は毛沢東の残した遺産、特に制度の遺産と観念の遺産が、彼らが進めようとする歴史の展開と不調和であるとしばしば感じ、調整を行った。これらの調整と改革は新時期をスタートさせ、新時期の初期の展開を導いたが、惜しむらくは、多くの面において、毛沢東時代の残した遺産を充分かつ強力に解決することができなかった。そして新時期がしだいに深まるにつれて、スタート時に潜伏していた問題がより大きくなり、新時期の歴史を深く傷つける重要な問題となった。

ここで毛沢東時代の伝統と鄧小平時代の伝統の衝突を提起したが、中国内外の多くの人が繰り返し指摘してきた論断——中国の現在の問題は、経済と経済制度の改革と同時に、対応する政治と政治制度の改革を行わなかったことにあるという論断を別の形で反復しているのではないことは言うまでもない。私が強調したいのは以下のことである。歴史的な視野から問題を意識しないことが、私たちが今日多くの問題について明晰な認識を持ってない根本的な原因のひとつになっている。つまり、今日の多くの重大な問題の形成は、毛沢東の伝統と鄧小平の伝統の交点まで歴史的に遡

ることができる。一面では、前の時代から残された基礎を自己の展開の前提としながら、この前提の要素とエネルギーを新しい展開の中でいかに処置し、転化させ、配置しなおすかという意識・思考の面において、常に不足があった。他面では、それまでの歴史に別れを告げ乗りこえるべきところで、それまでの歴史に束縛されてきた。問題が歴史の変遷の中で現代を傷つけていることがますます明白になっているのに、問題の発生と変遷について歴史的に遡ることがないため、問題について真に歴史に内在した十全な理解を得ることができていない。

例えば、私が提起した「家長制・ワンマン問題からの離別を出発点とした制度改革」がどうして反面に向かったのかの問題を例にしてみよう。もしも、文革が終わって、文革中にしばしば発生した暴力による教条的な批判や残酷な闘争を人々が否定したとき、その中にある社会主義体制官僚主義への批判と分析を、真剣に整理しなおし、位置づけなおすことができたなら、そして整理と位置づけなおした観点によつて、改革開放が始まったとき国家権力に関する思考を充実させ、精緻にすることができたら、さらにはその思考を基礎として、新しい状況下の官僚主義、国家権力の問題への把握と分析を続けていたとしたらどうであつたらうか。そのようにして展開した国家権力機構は、私たちが今日目にしている国家権力機構の現状——例えば機構がま

たたくまに膨張すること、トップの権力がますます制限を受けなくなっていることなど——と、少なくとも問題の深刻さにおいてかなり違はずではなからうか。同様に、もしも私たちが歴史の変遷の中で、国家の統合力がしだいに弱まり、エリートのアイデンティティが分散したことを注意深く観察し思考することができたらどうであろうか。現代中国の政治、経済、社会、文化に大きな影響を及ぼしているこうした問題の原因が、じつは私たちが問題に対して十分に敏感でなく、これまでの歴史、社会の中に備わっていた資源を運用し転化することにかけていなかったことと深い関係があることに気づくであろう。

もちろん、ここで毛沢東の伝統と鄧小平の伝統の関係をとくに提起したことで、「中国の現在の問題は、経済と経済制度の改革と同時に、対応する政治と政治制度の改革を行わなかったことにある」という論断に挑戦する意図もまったくない。なぜならば私の意図は、私たちの歴史と現実を正確に把握するための実行可能な手掛かりを探し、現在の条件下において、歴史中に存在する問題が歴史と歴史の生命を傷つけることを制止し改善する道を探ることにあるからである。この目標のため、私にとって問題のポイントは以下のようなになる。普通選挙、多党制、議会制だけを制度改革の唯一の指標としないで考えてみよう。すると毛沢東以後の中国でじつは一貫してさまざまな制度の調整や

改革が行われてきたことがわかる。問題は、その中で一部の調整・改革だけが予期した結果に基本的に到達でき、それ以外の調整・改革は予期した目標から逸脱したり、あるいは反面に向かってしまったのはなぜなのかにある。選挙制、多党制、議会制だけによって歴史を裁断することなく、歴史の展開の中で粘り強く問題を観察し、追究したときをはじめ、私たちの属する国家権力の活動のあり方およびそれが現在のような原因を、ほんとうに認識することができる。そしてその認識を基礎として、現状を改善する現実的な可能性の在処を、真の意味で、観念や幻想に よることなく見出すことができる。

中国の未来は現在の政治権力制度を放棄して彼の良いと思う政治制度に代えることにあると断定する人にとって、私の述べる現実認識は有意義であろう。なぜならばいかなる制度も、ある一定の歴史・社会・精神・心理の中で具体的な人によつて運用されるものであり、その意味において、どれほど周到な制度であっても理想の結果になるとはかぎらないからである。したがって、ある制度を理想と定め受け入れるべきと考えたならば、さらに一歩思考を進めて、制度を真に理想的なあり様にするにはどうするべきかを考えるべきである。そうした思考はいざいざ、歴史に、歴史の中の社会に、歴史と社会の中の個人の問題にかかわってくる。現在の中国では、社会を形成し、歴史を形

成し、社会心理と人間の生活と精神を形成するかなめは国家である。したがってこうした問題を研究し認識するには、国家権力の現実のあり方の問題、および権力のあり方によって塑造され同時に権力のあり方を塑造している社会問題、精神問題、主体の問題に触れざるを得ない。

五

国家権力の問題と比べて、現代中国の精神倫理の問題はどうであろうか。問題の拡がり方が広範であるため、この問題も同じように人々の日常的談論にのぼりやすい。しかも精神倫理の問題は通常国家権力の問題ほど権力にタブー視されないため、メディアにおいて国家権力の問題より頻繁に取り上げられる。そして両者とも、広く議論されていることと対照的に、認識と理解が極度に不足している。精神倫理の問題の現代中国における重要性は、少し考えればすぐに精神倫理の問題であると認定できる事件が、あらゆる人の身边で発生していることに何よりも示されている。さらに、どこにでもある日常事件の背後には大きな事件がある。一九九〇年代中国で最も印象に残った事件の一つ——新興宗教法輪功が短期間に広範囲に伝播したこと、および近年のおどろくべき現象である自殺率の急上昇など。これらの問題は、少し整理をすれば現代中国における精神

倫理の危機と深い関連がある事件であることがわかる。ただ精神倫理の危機が、はっきりと識別するのが容易でない方式で、人々の日常生活、社会生活、心身の状態を損なってきたこと、また社会と政治、経済、制度のすべてを損なってきたことは、冷静な観察をしなければはっきりと認識できないことが多い。

中国では自殺に向かう心理文化的傾向はもともと少なかった。ところが統計によると現在、精神の病によらない自殺率が世界の平均の二〇倍に達している（信じられないし信じたくない）。さらに一五歳から三四歳の人の死亡原因の中で自殺が第一位になっている。こうした現象はあまりに信じがたいものなので、さまざまな解釈が出てきた。現在の私の自殺問題についての理解から見ると、これらの解釈はほとんどの場合、想像を基礎として現代中国の自殺に論理的な反応をしたものとしか考えられない。あるものは現代中国の自殺急増の原因を伝統倫理の喪失に帰す。対応の方法は文化保守主義となり、倫理的な伝統を再提唱することになる。またあるものはモダニティの中国における帰結に帰す。そこでモダニティを批判することが対応になる。さらにあるものは貧富の格差など社会経済問題を直接的に名指す。対応はこの面の批判的思想を強めること、および国家に働きかけて再分配において弱者層に傾斜させることになる。こうした回答がすべてのはずれとはいえない

い。しかしこうした回答はどれも、現代中国の自殺急増が出現した歴史に対する精緻な研究と省察を前提としていない。したがってこうした回答が問題そのものに寄り添えないのも不思議でない。例えば最初の認識は、現代中国の自殺問題をかなりの程度中国の現代史から切り離せると考えるので、過去に有用であった処方箋によってそのまま解決しようとする。二番目の認識は、性急に現代中国の自殺問題をグローバルなモダニティの危機の一環と見なすので、同じように現代中国の自殺問題を中国の現代史からほとんど切り離せると考える。それと比べると三番目の認識は、現代中国の社会問題と危機への理解を参照しているが、過剰に早く過剰に直接的に、現代中国の自殺問題を経済問題、社会公正の問題と同一視するため、実のところ、精神倫理の問題と現代中国の自殺急増の問題の連関を抹消しているに等しい。

私は「大多数の人の精神生活において苦悩と不安が増えている」ことを一つの問題としてとりあげ、経済の再分配や国家機構のようなすでに公認されている、もしくは容易に賛同を得られる大問題と並べて論じる。その理由はもとより、この問題が人々の生命体験、生存体験に直接かわわっているからであり、またこの問題は現在衝撃的なほど強烈に生活や生命を傷つけているからであり、さらに国家、知識界、メディアがこの問題の理解と把握において

あまりに衝撃的なほど無力ぶりをさらけ出しているからである（大学生の自殺が頻発している。本来ならば知識界はすでにこの問題に敏感に反応しているべきである。しかしなぜかわからないが、彼らの身近にいるはずの高級知識人は思考と反応の能力を失っている）。精神倫理と関係が明らかでない問題の議論ですらこのような状況では、この角度から政治、経済、制度、社会、行政、文化などの諸問題に有効に切り込むことなど望むべくもない。中国現代史の大きな特徴はまさに次の点にある。精神倫理からの有効な分析視角を持たないため、現代中国の政治、経済、制度、社会、行政、文化など諸領域がどうしてこのような姿になるのか、どうしてこのように活動するのかについて、深い把握と理解ができない。

したがって次のようにも言える。現代中国の精神史をめぐるとは、経済発展の分配、制度のあり方、環境、生態、エネルギーなどの諸方面で遭遇する問題と比べてきたとき、その問題をいかに意識し整理したら良いのか人々がわかっていないことから生じている。その意味で、精神史に関する問題を歴史的に検討することは、実のところ、私たちが現代中国の社会文化意識、学術思想意識の根本的な盲点を認識する助けとなる。またそれ以上に、私たちが中国現代史の展開の構造的な欠陥を深く認識することの助けとなる。

そして中国現代史の精神史にかかわる問題を真に意識し理解するためには、文革終結時に歴史的に残された精神倫理の遺産と、中国現代史が半ば無意識のうちにこれら遺産に対応してきた際の失敗について、同様に振り返らなければならぬ。

簡潔に述べるとこうなる。中国は近代国家の建設まで多くの障害を経験したため、中国革命の結果の一つである中華人民共和国の建国に際して、大多数の中国人は強い期待と情熱を持った。さらに建国後の新国家は、以前から残されてきた問題の処理と新生面の開拓において成果をあげ新しい空気を生み出したので、大多数の中国人は当時の国家指導者毛沢東と共産党に対して熱烈な信任ないし信仰を持った。そして国家は指導者が自ら選んだ論理、自ら定めた理想に強い自信を持ち、社会と民衆は毛沢東・共産党に強烈な信任ないし信仰を持った。そのとき、社会が国家によって高度に統合された状況下において、国家と社会が共同で伝統倫理に対する批判と破壊を行い、当時理解され認定された共産主義倫理・情操によって伝統的倫理に代えようとした。

しかしながら、この提唱され導かれた新倫理・情操は、過剰に当時のイデオロギーの正しさを基礎とし、また過剰に国家指導者と共産党の指導の正しさを基礎とし、日常生活、日常の活動、日常の心身を基礎とすることなく、安

定した日常領域から意味を得ることもなかった。そのため歴史の挫折があったとき、前の狂信的なイデオロギー論理に対する不信が生じ、前の狂信的な国家指導者と共産党への不信が生じ、あわせて前には獲得を目指し他人に薦められた倫理と情操への不信ないし反感が生じた。そのうえ伝統倫理が強烈な打撃をうけて虚弱になっていたため、文革終結後、ある種の人々のあいだで、熱狂からくる虚脱、熱烈からくる冷淡、狂信からくる虚無の社会的精神状況が広がった。

こうした虚脱、冷淡、虚無はあったものの、多くの人々には別の面も見られた。彼らも高揚した理想主義精神が歴史的挫折をこうむったことの打撃を受けてはいたが、他方で、人間は歴史、国家、民族、社会に対して責任を負うべきだという精神的傾向の理想主義の核は影響を受けなかった。これは本来、前の中国革命と中国社会主義の実践がポスト文革期に残した最も貴重な遺産の一つである。当時も、一方で虚無的な気分や心理が蔓延しながら、他方で理想主義がなお強く残っていた精神史的情况を明晰に意識できていたらどうであつたらうか。新しい時代と歴史の境遇のもと、新しい時代の課題のなかで、この理想主義をいかに転化して効果的な形式と着手のポイントを作り出すかを考えていたらどうであつたらうか。すなわち、歴史、国家、民族、社会に責任を負うことに意味を与える精神を手

放すことなく、それを大きな歴史、政治的課題に解消させず、日常の活動、生活、心身の中にポジションを見出しそれに意味を与えられたらどうであつたらうか。そして同時に当時の虚無心理をいかに転化し吸収できるか考えていたらどうであつたらうか。すなわち、文革終結時の虚無心理はかなりの程度たんなる情緒でしかなく、挫折を契機とした、それまでの熱狂状態に対する一種のリバウンドであつた。当時の虚無者の心理をみるに、多くは責任を負わない生活が良いとほんとうに思っていたわけではなかつた。當時も、このような明晰な問題意識を持っていたら、中国の新時期は、現在私たちが目にしてのものとまったく異なつた精神史を迎えていたことは明らかである。

残念ながら、当時は国家のみならず知識界も、ここで述べた精神倫理状況に対して明晰な思考と意識を持たなかつた。そうでなかつたら、現有の遺産と問題を直視し、遺産を拡張して転化し、問題を解消することができたであろう。また他方では、現実感覚をもとにして、伝統倫理の遺産を復活・転化させることに慎重に取り組み、さらに中国の歴史倫理意識と通じ合う国外の思想を見出し、導入することができたであろう。そうであれば中国の今日の精神倫理の状態がまったく異なるものになつたことは間違いない。しかし当時私たちが目にしたのは違う展開であつた。国家はこの問題について有効性のある関心を示さず、知識

界の多くは文革後の精神倫理に対して明晰な意識を持たずに盲目的に行動した。

現代中国の扼腕すべき精神危機・倫理危機は、必然ではなかつたと言える。それは中国独特の革命、社会主義の歴史と密接な関わりがあつた。また新時期の歴史のなかで、私たちの思考と実践が残された遺産に有効な処置を行えず、残された問題を扱えなかつたことと深く関連していた。したがって、問題意識を明確にして歴史を遡らないかぎり、精神倫理の危機の現代中国的性格について深い認識を持たないことは明らかである。また歴史に内在して問題を克服する実践的思考と実践的措置を有効な形で作り出せないことも言うまでもない。以上のような認識にもとづいたときはじめ、胡温新政が目標として掲げる「人を本位とする」について、各種の政治的指標、経済権利の指標以外に、現代史の中の「人」がもつ歴史的時代的内容と精神文化の内容として、より正確に理解することが可能になる。

六

重要なポジションにいる政治人物は、さまざまな問題、情報、要求が集まってくるため、現実の全体的なメカニズムがはらむ衝突や緊張を意識する条件に恵まれている。胡

錦濤・温家宝の言論や行動を見ると、中国の現在の困難は収入の再配分やエネルギー資源の消費や生態環境などの問題だけに留まらないこと、それは国家権力機構の現状と深い関係があること、さらに国家権力機構の問題は社会に広がる精神・心理の問題と深く関わっていることを、彼ら自身はつきりと認識していることがわかる。例えば、彼らが共産党と現在の国家に危機感を持っている言論が繰り返し伝わってくる。また彼らは共産党員の先進性を保つ学習運動を強力に推進している。さらに「立党は公のため、執政は民のため」のスローガンと執政能力を強調している。こうしたことを自身の権力を強固にするための策略に過ぎないとは言い切れないだろう。「八榮八恥」の榮譽觀の提起も、一時の思いつきではないだろう。

しかしながら胡錦濤・温家宝の言動から以下のことも見て取れる。彼らは現状の厳しさや複雑さを知識界の多くよりは明晰に認識している。しかし多くの問題に対する彼らの理解・把握はまだ平面的であることも否定できない。共産党員の先進性を保つ教育や、「立党は公のため、執政は民のため」「八榮八恥」のスローガンなど彼らが打ち出す対策を見るに、問題の方向性を感じとったあと、問題が生まれてきた歴史、制度、観念機制について系統的に認識を深めることをしていない。その結果、彼らの対策の現実的効果にかなりの限界が見られる。問題は数多あり、しかも

それぞれの問題は錯綜しているのに、問題が現れ、大きくなってきた歴史、制度、観念機制について系統的な把握・理解をしていない。こうしたことのため、現在の国家は具体的問題に直面したとき、ほとんどの場合、きわめて粗暴ないしは野蛮な手段に戻ってしまう。こうした手段の存在は、胡温新政を善意に想像する人を困らせるばかりでなく、もともと中国の体制にまったく好感を持っていなかった人が現在の国家に性急な判断を下すための証拠となっている。例えば、一方で「和諧社会」のスローガンを各地で唱えながら、他方では、明らかに不公正な待遇に反発した抗争など社会抗争に対して厳しい処置を下し、言論とメディアに対してより厳しい統制と圧迫を加えている。このような一見矛盾している現象がどうして出現するのだろうか。私の分析視角から考えると、胡錦濤・温家宝がこのような手段を黙認ないしは支持することは、少なくとも以下に述べるような認識上の問題点と関係がある。

第一に、胡錦濤・温家宝はかなりの程度現在の問題の複雑さを意識しているが、問題に対する系統的な思考ができているため、半ば無自覚のうちに、社会問題を主として分配の不正、社会福利保障の不足など経済的範疇の問題として理解している。そこで彼らの解決の道筋は、国家が掌握する資源と財政収入を再分配することとなる。こうした再配分が実現し社会保障制度が構築されれば、社会問題

は基本的に消滅すると彼らは信じている。しかし社会に不満の感情が広がっているため、彼らの政策・方針が充分に貫徹する前に、ひとたびコントロールを失ったら社会動乱となる可能性がある。そこで現在は社会抗争に対して厳しく弾圧することが必要になる。彼らの想定した政策・方針が貫徹すれば、社会の不満の感情も大いに減少し、社会的抗争も根本的に減少ないし消滅すると彼らは考える。したがって現在の厳しい弾圧は、じつは後の弾圧を避けるためであり、過渡的な手段に過ぎない。

第二に、胡錦濤・温家宝の社会問題解決の考え方は、主として国家が掌握する資源と収入の再配分であるが、それは経済の順調な成長と十分な中央財政に支えられている。したがっていかなる行動も、経済の成長と中央財政の能力に影響を与えるものであつてはならない。

それが意味するのは、じつは以下のことである。前の江沢民政府と比べて、現在の政府は現実をより全面的かつより強力に感じとり、新しい局面を切り開く自覚と決意を持つている。しかし基本的な実践の場面では、「安定がすべてを圧倒する、発展こそが強固な道理である」の古いやり方を抜け出すことがない、もしくは抜け出そうと試みても戻ってしまう。しかも現在の問題はより一層深刻なので、胡温政府は「安定」についてむしろより過敏で厳しくなる。実際、私たちがすでに目にしているように、現在の

政府は前の江沢民政府よりも一層多く、過剰に弾圧、統制を行っている。

したがって、知識界がこのような状況下でほんとうに自己の責任を果たしたいと願うのなら、人々に歓迎される政府の措置や言論に支持を表明し、明らかに誤りを批判し改善を促すだけで充分でないことは明らかである。自己の重心の一部を、歴史に内在しながら現実を把握する方向へと移すべきである。すなわち、さまざまな問題を歴史の上において明晰に関連づけることを通じて、現実についての系統的な理解を打ち立てるのである。そのようにできたときはじめて、私たちは、平板で固定しているかに見える現実が、じつはさまざまな契機と可能性に満ちていることに気がつく。そして契機と可能性の提示に成功したときはじめて、私たちは、現実の困難に身を置いた状態から思想の道へと足を踏みだすことができる。そのような思想の道を歩むことで、責任感のある政治人物が、インスピレーションに満ち現実的に実行可能な方法で現実の困惑を抜け出すことが可能になり、また、有効であると信じていたが実際には疑わしかった現実理解や現実への対応方法を抜け出すことが可能になる。そればかりでなく、社会がより正確に自己意識と自己理解を手に入れ、私たちにとつての良い生活を充分に認識することが可能にもなる。良い生活とは、経済の成功や国家がより一層責任を担うことだけに存在す

るのではない。新しい生活共同体、新しい倫理や生命の理解、新しい精神のあり方、新しい意味獲得の道筋などを開拓し見出すことの中にも存在する。もちろんここで同時に重要なのは以下のことである。知識人も、このような思想の道を真に歩んだときはじめて、自己と歴史・現実のあいだの関連の可能性が多数あることを充分に意識できる。また自己の介入のポイントと介入の方法をいかにして責任あるものに、実効的なものにしてできるか正確に考えることができる。さらには自己の思考・研究がもつ現実的な有効性・実効性と、人間・社会・歴史・世界に関する自身の理想を結合させることができる。

結論に向かおう。現代中国の問題は深刻であり多面的であるため、中国の問題を主として経済成長の問題もしくは富の再分配の問題と理解することは許されなくなっている。政治機構、社会機構の問題、日常生活の設計、心身の不安定などの問題は、経済的手段だけを通じて真の解決をはかることはできない。政治機構、社会機構、生活の充実、心身の安定などの問題を過度に経済的原因に帰結させるのは、問題そのものの性質を遮断するのみならず、現代中国の経済問題そのものへの理解も損なう。中国の問題を成長の問題や再分配の問題と理解するだけで、中国の権力機構や精神のあり方の問題を同時に思考しないと、実際に

はこうした問題を離れて単独で考えることはできないため、必然的に経済成長や再分配の問題も（さらに環境、生態の問題を含む）、根本的な改善を妨げられることになる。

したがって、現実を明晰に把握し、さまざまな問題が錯綜する困難を突破するためには、それぞれの問題の歴史と歴史展開のロジックを見極め、ある問題が現れてきた歴史の機制の中において他の問題をどのように位置づけるか考えなければならぬ。そうしたときはじめて、さまざまな問題のあいだの実際の関係性を見極めることができる。しかもそうしたときはじめて、ある問題について実践的な対応を考えるとき、その問題の現れ方だけに注目することなく、さらになおさら、その問題が出現するにいたった歴史、制度、観念、精神の機制を探究する努力をできるようになり、しかもそれを媒介として、その問題と関連する他の問題とを結びつけて思考することが可能になる。そうしないので、他と切り離して問題だけに対応するならば、その問題が現れてきた歴史と現実の機制は存在しつづけるのであるから、問題を一時的に改善もしくは解決することはできても、またたくまに無効になるであろう。そればかりか、一時的な解決は、無理な対策を思考するため、より大きな代価を支払うことになりがちである。

ここまで述べてきた現実把握の方法を用いれば、貧富の格差などの社会問題・危機を思考し解決するとき、経済の

高度成長と潤沢な中央財政を前提とした収入の再配分という隘路を徘徊するだけでなくなる。そのみならず、環境・生態の危機や持続可能な発展を思考し解決する際に、「科学的発展」の目標と現実の発展の道筋とのあいだのすでに明らかになりつつあるジレンマを突破することが可能になる。なぜならば、中国の近年の高度経済成長とさまざまな社会問題・危機が現れてきた経過について精緻な歴史分析を行うことで、私たちは以下のことを知ることができるからである。いままで発展に不可欠な条件だと考えられてきた問題・危機、あるいは発展の不可避の帰結だと解釈されてきた問題・危機は、じつは発展の必然的な条件ではなく、発展の必然的な帰結でもなかった。たとえ関係があつたとしても、さほど強い必然性を持つた条件とはかぎらず、さほど強い帰結であるともかぎらなかつた。つまり、現在の社会問題・社会危機が形成されるにいたつた政治、経済、制度、歴史、観念、主体の機制について精緻な分析と認識をすれば、私たちは以下のことをはつきりと理解できる。こうした問題・危機と発展は、多くの場合、不可避もしくは改善不可能な因果関係にあるのでなく、関連する要素に対して調整と改善を行うだけで、かなり弱体化もしくは解決させることができる。

例えば、持続可能な発展などすでに多くの人が熟知している意識・観念を考えると、発展主義を漠然と批判して

も、その批判が当初持ち得ていた重要性はもはやなくなつている。ことに発展が社会問題・危機を解決するための基本的な前提とされているとき、発展主義に対する漠然とした批判は力を失う。ある問題を評価するために必要な基本的観念を確定し整理できたとき、その後続けて同様に重要なのは、あるいはそれ以上に重要なのは、問題の発生過程、発展過程を緻密かつ正確に認識することである。基本的観念の整理は、もちろん私たちが問題を思考し評価するための基本的な方向性を示すが、私たちが実際に有効なやり方で問題を解決するための、具体的な実践のプランをそのまま示すことはない。とくに問題が一連の問題群の中で錯綜しているときはなおさらである。私たちは基本的観念の確定と整理を行つたあと、注意力をその問題および問題と錯綜した関係にある問題群の方向へ振り向け、緻密で正確な把握・分析をしなければならぬ。そのようにしたときはじめて、ある問題の歴史と現実に対する私たちの認識は、あるべき広さと深さに達することができる。こうしたことを基礎とした政治的思考・行動こそが、最も建設的で有効であり、最も代価と損害が少ないものである。

以上の意味において私たちは断言できる。現在、中国の思想と政治実践は分水嶺にある。私たちはすでに、中国の現実と未来に対して重要な基本的観念を一定量手に入れている。しかし私たちはまだ、こうした観念を現実と未来に

安定した形で実現させることのできる思考を手に入れていない。本稿が強調したいのは以下のことである。実践に向けて強い指導的役割を果たせる妥当な思考をほんとうに手に入れるためには、正確な問題意識による中国現代史の再検討と分析から離れることはできない。まさにこの意味において私たちはこのように断言でき、かつ断言しなければならぬ。中国の現代史についての正確で深い把握・理解は、現在の中国において、投資、エネルギー、消費、環境など重要性が明白なように見える諸問題以上に、より基本的でより切迫した政治課題であり、歴史課題である。

注

〈1〉 九〇年代初中期には、八九年の国家による社会民主運動鎮圧のため国家への不満があり、また当時流行していた思潮・観念が市場の作用に過大な想像と意味を与えていたため、知識界は国家の問題について、中国の歴史と現実に対する十分な分析を施さないまま、可能な限り国家権力を弱体化させるべきという態度をとっていた。

〈2〉 胡锦涛・温家宝が社会問題、社会危機に積極的な応答を行い、解決を約束したことは、中国ですぐに積極的な反響を引き起こした。例えば、中国で影響力のある『南風窓』雑誌の若き編集長章敬平は、二〇〇三年三月から二〇〇四年三月までの中国の状況を描いた著書『拐点——決定

未来中国的「二二個月」（「ターニングポイント——中国の未来を決定した十二か月」）において、この一年を改革開放以来二五年間直線的に進んだあとに訪れた重要なターニングポイントとしている。彼は著書の第一部の題名を情熱をこめて、「公正主義」による「富人時代」の終結」と名付け、二〇〇三年の「两会」（全国人民代表大会と全国政治協商会議のこと）を「貧者の饗宴」と呼んでいる。『拐点——決定未来中国的「二二個月」北京・新世界出版社、二〇〇四年。

〈3〉 もちろんこれは、二〇〇〇年前後に多くの中国知識人が自己の立場を大きく調整し、反省しあるいは変更した現実のおよび思想的背景でもある。

〈4〉 その中で最も正視に耐えなかつたのは民間の人権擁護人士への暴力的な弾圧である。

〈5〉 全体的に見て、胡锦涛政府の言論、出版、インターネット、新聞などへの管理の程度および暴力の程度は、江沢民政府の後期を越えている。

〈6〉 ここ数年、中国の中央政府の権力についてよく見かける言論は以下のようなものである。公開の場では慎重な態度、ためらいを示し、客観的中立であるかのように振る舞うが、よく観察すると、その言論に、国家権力への同情ないし弁護の傾向があると判断できる。こうした現国家への同情・現政府の弁護の傾向は、私的な場面ではよりはっきり発揮される。明らかに国家と関係があり国家にとって不利な多くの現象や問題を、以下に述べるように、中央の派閥

闘争の存在によって解釈することなどが見られる。

〈7〉文化大革命以後の中国の知識人と国家権力の離合は、充分な整理・分析をするためには一つの論文ないし著書が必要なテーマである。私は初稿にあったこの問題に関する概説と議論をすべて削除した。初稿においてこの部分は五〇〇〇字以上になり、本論者の長さおよび構造に大きな影響を持っていた。しかし記述と議論があまりに粗雑だと判断したため、削除した。将来この問題についてより完全で十分な記述と分析ができることを願っている。

〈8〉例えば胡錦濤が関係していると伝えられる言論統制および人権擁護人士への弾圧は、一部の知識人には、胡錦濤が望んだものでなく、胡錦濤が行ったあるいは黙認したのは中央に派閥闘争があったためであると解釈された。そして胡錦濤は行ったあるいは黙認したことで、敵に口実や攻撃の糸口を与えなかったという。

〈9〉科学的発展観という用語は、狭義から広義に用法が広がってきた。中国共産党一七回大会になると、科学的発展観は、江沢民の「三つの代表」と同じく、それによって胡錦濤政府が自己規定するイデオロギーの総称になった（胡錦濤の一七回大会報告を参照）。本稿での科学的発展観の用法は、中国の現政府がはじめに使ったときの狭義にしたがう。

〈10〉以下のホームページを参照。http://www.022net.com/2006/12-31/551873413383660.html http://news.163.com/07/0116/09/34USE5EO00011SM9.html

〈11〉もちろん、再分配が理想的でなかった江沢民時代の歴史状況との対比からくる心理的効果があり、それが胡温政府の再分配政策に対して中国社会が過度の好評を与える重要な背景となっている。

〈12〉彼はこう述べた。農村の水利建設では、中央官庁から省、県、郷までが必ず多くの金を持っていく。田畑を森林に戻すプロジェクトでは、林業部門がいくらか持っている。さらに地方が資金を建設に用いず、手抜き工事や汚職に用いたならば、最後に農民が金にすることができなくなるか。そこで彼は、三千数億元の特別支出金に対して監査を行い、中央の特別支出金が腐敗した官吏のものになり、農民は見ることもされることもできないことがないようにすべきだと、国家に建議した。(http://news.sina.com.cn/c/2006-03-07/03579281057.shtml)。しかし問題は残る。監査機構を設けるだけでほんとうに彼が憂慮する問題を解決できるだろうか。

〈13〉中国の奇跡を研究する者の中には、国家政権と密接な関係を持ち、その関係を通じて現実的作用を一定程度發揮できる人もいる。彼らの研究・思考が現実への対策の意味しか持たないとはいえないし、彼らの執筆と思考が独立性と誠実さを失っているとはなおさらいえない。しかしそれでも、現在の国家権力と知識人の協力関係には微妙なルールや隠されたルールがあることは否定できない。したがってこのポジションにいる知識人は、たとえ自覚的に誠実であるろうとし、強い独立意識を持っていたとしても、現実的

作用を發揮するポジションを保ち続けたいと願う以上は、半ば無自覚のうちに、自己の公開の言説・執筆に対してある種の規制を加えざるを得ない。

〔14〕以上の問題は拙稿「時代的認知要求と人文知識思想的再出發」で提起したものである。『当代中国的知識感覚と觀念感覚』（台北・唐山出版社、二〇〇六年）に収録している。関心のある読者は参照されたい。日本語訳は「時代の要請と中国人文思想の再出發」『現代思想』第三三卷第一一三号、二〇〇五年。

〔15〕一般的意味での検討に関心のある読者は、拙稿「時代的認知要求と人文知識思想的再出發」(「時代の要請と中国人文思想の再出發」)の、とくに最後の一節を参照されたい。

〔16〕国家が近年「八榮八恥」を提起したことは、国家も精神倫理の問題の重要性に気づいたことを示している。しかし「八榮八恥」の内容と国家による宣伝の方法を見ると、彼らがじつは現代中国の精神倫理の問題に対する真の認識を持っていないことが事ごとに示されている。(なお胡锦涛の提起した「八榮八恥」の内容は下記の通り。「以熱愛祖国為榮 以危害祖国為恥 以服務人民為榮 以背離人民為恥 以崇尚科学為榮 以愚昧無知為恥 以辛勤勞働為榮 以好逸惡勞為恥 以團結互助為榮 以損人利己為恥 以誠實守信為榮 以見利忘義為恥 以遵紀守法為榮 以違法亂紀為恥 以艱苦奮闘為榮 以驕奢淫逸為恥」〔訳者注〕。

〔17〕一言言明しておく。紙数の関係で、本稿における現代

中国の精神と主体の問題についての整理および議論はきわめて簡略なものになった。私は将来別稿にて現代中国の精神と主体の問題に関する長期的思考と研究を執筆する予定である。関心のある読者はお待ちいただきたい。